

中国学と日本学との握手

王 暁平

(天津師範大学)

百年以来、中国の文化研究者たちは各自関心のあるテーマを取り上げ、それぞれの方法論によって、オリジナルな日本文学研究を展開し、興味ある成果をあげていた。そのなかで中日文学の比較研究は五四新文化運動前後に始まった。1918年、周作人氏の発表した『日本における近三十年の小説の発達』をきっかけに、先に唱導されたのである¹。但し、各種の原因によって、20世紀70年代までも、日本古代文学の漢訳も少なく、本格的なる両国文学を対照的研究する論文も多くなかった。70年代以後、日本文学は組織的、本格的研究の時代を迎えたのであった。中日古代文学の比較文学研究は、日本文学を翻訳するブームに伴い、比較文学という学科の観念の強化につれて、迅速に展開していき、文学ないし、比較文学の中の最も繁栄の分野のひとつになった。グローバルな視点と精密な考証とを兼ね備えた研究はその時期から始まってきたといえる。

(一)

80年代から、北京大学の嚴紹璽教授はより早く中日古代文学の比較研究に携わり始めた。続々と『日本古代小説の発生及び中国文学との関連』²、『日本古代短歌における漢文学の形態』³、『記紀神話における変異の模式と形態及び中国文学との関連』⁴等を発表しつつあった。1987年、嚴紹璽氏の著作『中日古代文学関係史稿』が出版された⁵。この著作は作者の中日古代における文学関係を研究する集大成となり、代表作品ともなった。

『中日古代文学関係史稿』は謙虚に「史稿」と称されても、ただの資料の整理だけではなく、明確な学術思想と強烈的な学術個性は全書を貫いている。本書に触れてい

1 周作人著「日本近三十年小説之発達」、『北京大学日刊』（第141～第152号、5月20～7月15日）及び『新青年』（第5巻第1号、7月15日）、『芸術与生活』収入。

2 嚴紹璽著『国外文学』、1982年第2期。

3 嚴紹璽著『北京大学学報』、1982年第5期。

4 嚴紹璽著『中国比較文学』、1985年第5期。

5 嚴紹璽著『中日古代文学関係史稿』、湖南文芸出版社、1987年。

る内容から見れば、中日古代文学の関係のすべてを描き出すつもりはない。いくらかの重要な分野と課題しか選ばず、全景の代わりに、具体的な事例を研究したのである。

全書は8章に分け、順に「中日神話の関連」、「日本古代の短歌における漢文学の形態」、「上古における中国人の日本に関する知識と日本文学の西漸」、「日本古代小説の肇始及び中国文学との関係」、「日本の中国韻文史における白居易文学の地位と意義」、「中世における日本の女性文学の繁栄と中国文学からの影響」、「中国の文壇における中世、近世の日本文学の地位」、「明清俗文学の東漸及び日本の江戸時代における小説の繁栄」など計八つの問題からなる。これらの問題は皆中日文学関係の大事で基本的な問題である。

嚴紹盪氏が研究中に日本古代文学の基本の性質と民族の特徴に対する見方を提出した。それは日本古代文化が「複合形態の変異体文学」だということである。この前発表された中日文化の比較研究についての文章に、嚴氏は日本文化の本質が「変異体文化」だという観点を打ち出した。

「変異体文学」は「変異体文化」の一部であり、嚴氏の文学研究における「変異体文化」に関する叙述と論証でもある。日本文化及び中日比較文学の研究について、数多くの学者は外来文化をよく吸収して消化して改造する日本文化の特徴を強調したのである。例えば、日本学者、加藤周一氏は日本文化が「雑種文化」だと認めている。その特徴は日本文化と伝統文化及び西洋文化との融合は離れられないことになる。嚴氏の「変異体」という見方は中日比較文学の分野における外来文化を吸収する日本文化の特徴を一步深く具体的に、明晰的に、深刻的にした結果である。

嚴氏は本書の「まえがき」に以下のように述べた。

文学の「変異」とは、文学の備える外来文化を吸収し、且つ受容させ、新しい文学形態を形成する能力を指している。文学の「変異性」が表してきた外来文化に対する「吸収」と「受容」は、一般的な意味ではない。生物学の立場から見れば、「変異」は新しい生命、新しい形態を生み出させるのである。文学の「変異」とは、普通、民族文化を母にし、外来文化を父にし、両方を相互に融合し合い、新しい文学形態となった。この新しい文学形態はももとの民族文学のある性質に基づいて継承されたものである。且ついつそう高いレベルに達して発展しつつある。

……この融合し合ってから生み出した文学形態は、ただの「輸入品」ではなく、日本民族の文学であり、日本民族の心を表す民族文学である。

こういう理論のまとめは作者の中日文学の比較研究という実践に基づいたものである。一方、逆に具体的な問題を研究するための理論の要綱になる。嚴氏は日本学者の研究成果を十分に吸収して消化した上に、学術結論を支えるために極めて豊富

な文献材料を使用し、明確に深刻に立論する方面には、前人の成績を超えた。

巖氏は古代における中日文学関係を研究するときに、自覚的な方法論意識を持っている。其の後巖氏から提出された「原典的な実証研究」という方法は彼の研究しつつある実践の総括と認める。「実証」という方法は、科学研究の基本的な方法として、よく利用され、長い歴史を持つ。しかし、「実証」の方法は人文科学という主観性、人文性の強い学科においてどのように使用されていいのかはまだ検討する価値がある問題である。巖氏は「原典的な実証研究」が操作できるシステムと考えている。このシステムは四つの方面からなる。

- 第一、相互関係を確証する材料の原典性；
- 第二、原典材料の確実性；
- 第三、実証の二重性；
- 第四、双方の文化の雰囲気の実証性。

ここに強調しようとするのは原典による根源を明らかにする研究である。それは作者の文学研究の深刻な体験から齎してきたものに違いない。

巖氏は中国比較文学界における文献学の基礎が相当固い数多くない学者の中の一入である。1980年に出版された『日本における中国学の学者』を基礎にし⁶、1992年に『日本における中国学史』が出版された⁷。近年、『日本における漢籍の流布についての研究』⁸、『日本蔵宋人文集善本鈎沈』⁹、『日本に所蔵している漢籍善本の追跡の紀実——巖紹壘海外訪書志』¹⁰、『比較文学の視野における日本文化』¹¹ 350万字、18,000種類 of 古籍を収録した『日蔵漢籍善本書目』¹²等の文献学の、または文献学に基づいた論著が発表された。文献学の基礎の強さは彼の中日古代文学の研究に体现できる。

具体的にいうと、材料ができるだけ豊富になり完備になり、一切の研究は文献資料と作品本文の分析を始めにし、決して大きくて不当な空論を発表しない。と同時に、彼の作品を読んでいる時、読者が材料に押し流された憂鬱は全くない。それは作者が明確な学術思想により、材料を有機的に統一してきたからである。この学術思想は方法論だけではなく、また文化の哲学の視点として現れたのである。

巖氏の『文化の伝送と不正解な理解の形態』¹³に引用されたヘーゲルとマルクスの結論、即ちヘーゲルの『歴史哲学講演録』に提出された「歴史は事実の描写であり、事実そのものでもある」という結論と、マルクスが提出した「文化の伝送中に不正解な理解の形式はちょうど普通の形式であり、しかも会社のある段階において

6 巖紹壘著『日本の中国学家』、中国社会科学出版社、1980年。

7 巖紹壘著『日本中国学史』第一卷、江西人民出版社、1991年。

8 巖紹壘著『漢籍在日本の流布研究』、江蘇古籍出版社、1992年。

9 巖紹壘著『日本蔵宋人文集善本鈎沈』、杭州大学出版社、1996年。

10 巖紹壘著『日本蔵漢籍珍本追跡紀実——巖紹壘海外訪書志』、上海古籍出版社、2005年。

11 巖紹壘著『比較文学視野中的日本文化——巖紹壘海外講演録』、北京大学出版社、2004年。

12 巖紹壘著『日蔵漢籍善本書目』、中華書局、2007年。

13 巖紹壘著『中国比較文学』、1998年第4期。

よく使用された形式に適合する」という結論により、「比較文化と比較文学の研究者はもっと困難な仕事に直面している。その仕事は「不正確の理解の中に」、文化の伝送の軌跡を通し、各種の「変異形態」の文化から、「本物の文化」を回復させる」。

『日本における中国文学』は嚴紹盪氏と王曉平による共著であり、花城出版社の『外国における中国文学叢書』の一部として1990年に出版された¹⁴。著者は前言に「『日本における中国文学』を著す目的は日本における中国文学の流布の軌跡と方式を描写し、中国文化を受けている過程に、日本の民族文学の内部に起こったいろいろな変異を明らかにしようとする。日本人の中国文学に対する観念の形成、発展及び変革を検討し、日本学者が中国文学を翻訳したり、評論したり、研究したりしていることを通じて、形成された学術流派、研究の特徴、成果及び発展の趨勢などを総括的に評価しようとする。」と書いてある。この本は確かに著者の以上の目的に達したと言えるのであろう。日本の研究者は「日本における中国文学」について数多くの研究成果を上げた。その成果はこの本に溶け込ませている。そればかりでなく、作者たる学術見解を提出し、古代から今日まで日本における中国文学の流布と影響の軌跡を大体描き出してき、かなり役立った。勿論、こんな膨大な題目はたった30万字の長さから見れば、もっと多くの問題にはまだ触れていない。

1996年、嚴紹盪氏中西進氏（日本学者）の共著『中日文学交流史大系・文学巻』が浙江人民出版社によって出版された¹⁵。その中に中日両国の学者の研究成果が収録された。嚴氏に執筆されたこの本の序文、第一章及び第三章は、中日神話および物語の中国小説との関係という内容に触れ、大体『日本古代における文学の関係史稿』に基づいて書き直したものである。但し、材料は更に豊富になり、深刻になった。

要するに、嚴氏の中日古代文学の比較研究における貢献は著しくて開拓する価値がある。特に『中日古代における文学の関係史稿』は彼の代表作品だと称されることが出来る。この本も二十年来、中国比較文学の研究における佳作とも言える。表されてきた学術研究の方法論と堅実で嚴密な学風は称賛に価すべきである。

(二)

王曉平はより早く比較文学の研究に携わった学者の一人であり、中日古代文学と近代文学の比較研究において多数成果を上げた。80年代の初期の『「万葉集」の「詩経」からの参考』¹⁶や、1984年の『「今昔物語」の中の中国物語』¹⁷等の影響の深い

14 嚴紹盪、王曉平著『中国文学在日本』、花城出版社、1990年。

15 嚴紹盪、中西進主編、『中日文化交流史大系〔6〕文学巻』、浙江人民出版社、1996年。

16 王曉平著『外国文学研究』、1981年、第4期。

17 王曉平著『中国比較文学』創刊号、1984年。

文章を発表した。

1987年、湖南文芸出版社によって出版された王の『近代中日文学交流史稿』¹⁸は、上記の嚴氏の『中日古代文学関係史稿』と同じように、『比較文学叢書』に属し、姉妹編とも言われる¹⁹。『近代中日文学交流史稿』の30万字の長さはあまり長くないが、極めて豊富な内容と数多くの学術情報で、学術研究と知識領域のブランクを埋めた。「二十年来、わが国の読者の中日近代における文学関係に関する知識は大体この本から出てくる。中日近代における文学研究は日本の学者がより早く始め、たくさん成果を上げた。」「王曉平氏の著作は日本学者の研究成果を十分に吸収して参考にした上に、真偽を見分けて練り上げることに工夫したため、ある程度に引き上げられた。学術水準から見れば前人を乗り越えたのがはっきり見える。」と評価される²⁰。

『近代中日文学交流史稿』の所謂「近代」は、大体19世紀の半ばから20世紀のはじめにかけての五十数年間を指しており、それぞれ日本の江戸末期から明治時代、中国のアヘン戦争前から清の時代の末、中華民国の初めにあたる。この時期においては、中日間の文学交流は盛んで、頻りに行われ、それに頗る複雑な様相が呈されている。日本文学の主体である文人、作家は、代々傳承されてきた漢学的教養に富み、その文学にも中国文学の影響が見逃されない。けれども、かれらは西洋文学への関心が高まり、その文学に中国文学の影響が次第に淡泊になる。一方、長い期間にわたって日本文学の「先生」という役目を演じてきた中国文学は、この時期に、かえって「学生」として日本文学を摂取、学習するのである。

王曉平は『近代中日文学交流史稿』に近代中日文学関係の展開軌跡と様相を精確に示そうとしている。全書は二十章からなり、章毎に一つのテーマで中日近代文学関係における重要な課題が集中的に論述され、中日文学交流の手がかり、軌跡、ルート、様式などがありありと描かれている。方法論といえば、影響研究及び伝播研究が基本とされ、書誌学における著者の造詣が深く、研究態度が謹厳であることもうかがえる。「著者は学殖該博、識見卓抜で、材料を自由自在に活用し、影響関係を叙述、論考するに際して、時に点睛の筆を振り、精到なる理論分析を施す。故に、この著作はただの材料並べではなく、文献資料の考察と理論分析とを有機的に統合させ、生き生きとした伝播及び影響の研究で、比較文学影響研究においては、見事な手本と看做されている。」と、指摘している学者はいる²¹。

王曉平は『仏典・志怪・物語』²²を1990年に梓行し、インドの仏典、中国の志怪（即ち怪奇小説のこと）、日本物語を研究対象にして、このアジア三国の古典の関係

18 王曉平著『近代中日文学交流史稿』、湖南文芸出版社、1987年。

19 姜沢陽著「中日比較文学的新開拓——読王曉平『近代中日文学交流史稿』」、『文学遺産』1989年、第6期収載。

20 王向遠著『中国比較文学二十年』、江西教育出版社、2003年。

21 王向遠著『中国比較文学百年史』、寧夏人民出版社、2007年。

22 王曉平著『仏典・志怪・物語』、江西人民出版社、1990年。

を比較文学の研究の視野に導入している。中国の怪奇小説はインドより持参されてきた仏經からの影響があり、しかも中国語に訳された仏經、中国怪奇小説は日本の物語文学に影響を及ぼした。したがって、仏典、怪奇、物語はインド、中国、日本の文学交流の三つの基本的な点となり、この三つの点を一本の線をつないで、それによっては三国の文学交流の軌跡が描かれるのであろう。極めて魅力的な課題と言えよう。王は、この「三点一線」に着眼して、三国古典文学関係を考察するのは、「たいへん素晴らしい学識と知恵を見せている」という評価を得た²³。

全書は導論（案内）篇、浸潤篇、遡遊（遡源）篇、淵海篇という四つの部分に大分され、「まえがき」に、著者は次の如く、

仏典、怪奇、物語三者の比較研究は、その影響関係を見つけたり証明したりする上で、中古時代の芸術に対する理解と評価などの諸問題を深く究明せざるを得ない。怪奇小説や物語が仏教伝説の構想を摂取するときは、その全部をそのまま取り入れたり移植したりはしなく、たとえ踏襲的なもの、直訳的なものであっても、その思想と内容はある程度変容され、或は新たに規定されていて、受容者の連想も他に引かれる。インド式の自由闊達な幻想は、中国人が全面的に取り入れるのではない。中国小説に漂っている文人式の穏やかで堅苦しい想像も、日本人にさほど濾過される。そのいずれも、自分なりの想像体系を築き上げている。影響関係のある作品は、受容者はどのようなものを保存したか、どのようなものを捨てたか、原始材料はなぜ、それに如何に摂取、同化されたか、摂取されたものはどのように変容されたか、この一連の疑問は即ち考察の着眼点にして、幾つかの課題に対する検討を通じ、文学史の知識を拡充したり、早期小説の創作過程を了解したり、作品に対する芸術的理解をしたりすることができると思う。また、そういう影響関係の無い異国の作品に対して、そのテーマの分類と分析をし、国際文化交流の広い視野の下に総体的な考察を加え、こういう仕事は三つの国の文学の傾向、文学の伝統を検討するに資すべしと思う。

著者は『仏典・志怪・物語』にて、比較文学のいわゆる伝播研究、影響研究、平行研究という研究方法を活用して、インド、中国、日本という三つの国の錯綜たる文学関係を、多角度且つ多断面において研究したのである。

その「浸潤篇」には、『日本霊異記』『今昔物語集』『江談抄』などいくつかの作品に対する分析を通して、中国怪奇小説の当時の日本における伝播状況を明らかにしている。「遡遊篇」には、平行研究主題学の方法を用いて、幾つかのモチーフと題材、たとえば姨捨、蛇婚、宮廷における淫乱といったモチーフ、復しゅう、亀

23 陳融著「翻案之下有文章」、『読書』、1992年、12期。

の恩返しなど共通した主題に対して考察、比較的研究をした。

「淵海篇」には、影響研究の視点で中国経史叙事文学の日本物語文学に及んだ影響とその浸潤の様相を、ないし日本の近代作家の創作への啓発も条理的且つ簡潔に整理した。「著者は仏典と志怪と物語との三者の影響比較研究を通じて、中古時代における芸術理解と評価の問題に深く入り込んだ」と言われた²⁴。

『仏典・志怪・物語』については、比較文学評論家はこう述べた。「要するに、この『仏典・志怪・物語』はわが国の比較文学研究界では、アジア三国の文学を貫通させて、多角度的研究を為した今まで唯一の著作である。課題選択といっても、研究方法といっても、たいへん有意義な啓発が提供されている」、と²⁵。

王曉平が日本の碩学中西進氏と共著した『智水仁山——中日詩歌自然イメージ対談録』²⁶は、1995年に中華書局により刊行され、日本の『万葉集』と中国の『詩経』とを中心に、月、星、草木、花鳥などといった自然物のイメージに着眼して多方面、ミクロ的に分析、比較研究したのである。中西進氏は『万葉集』研究界の権威学者であり、王曉平は『詩経』研究の専門家である。「両氏は作品に対する爛熟的理解と比較文学の広い視野をもって、「対談」して少しのことから全貌を見通したり、共に問題を解明し、まるで真珠を連ね美玉をひとつに合わせるような効を収めたといえよう。」と、論評された。

対談は、中国学界ではさほど用いられないが、日本、欧米ではごく普通の著し方である。比較文学研究においては、同じでない国の学者の間に行われた対談は、異文化コミュニケーションのイメージが非常に強くつけられ、比較文学の目標と趣旨を十分に表される方法であろう。

日本文学の研究者としての王曉平の文学観の根本には、日本の文学と中国文学やベトナム文学や朝鮮半島の文学などの東アジアの文学と密接不可分の観方がある。王の『アジア漢文学』²⁷には、日本漢文学と中国文学との間には、そのように、漢字文化を包括的に捉えていくなかで、具体的に密接関連をもった世界が浮かび上がる。地域、時代、ジャンルを超えて、漢文学の体質に肉薄し、展開の諸相や相互の異同を把握しようとした。『梅と桜——日本作家と中国文化』²⁸では、広く日本の現代作家たちの作品と中国の思想や宗教や言語などの関係に言及するものの、古代中国文学を受容する過程のなかに反映されている日本文学の独自性を強調している。

24 唐建清、詹悦蘭編著『中国比較文学百年書目』、群言出版社、2006年。

25 王向遠著「20世紀80-90年代中国的中日文学比較研究概観」、『東方研究』2004年号、経済日報出版社、2005年。

26 中西進、王曉平著『智水仁山——中日詩歌自然意象対談録』、中華書局、1995年。

27 王曉平著『亞洲漢文学』、天津人民出版社、2001年。

28 王曉平著『梅紅桜粉——日本作家与中国文化』、寧夏人民出版社、2002年。

(三)

中国における日本古代文学の研究と言えば、翻訳と比較研究との相互的促進は大きな特色と言えよう。30年間、『万葉集』『源氏物語』『平家物語』をはじめ、『今昔物語集』や『枕草子』や『好色一代女』などまで、和歌、俳句、能、歌舞伎、狂言など、周作人氏などの訳者の訳作は何度も再版され、新しい訳本は次々登場した。北京や東北地区の吉林省はもちろん、西南地域の雲南省や華北地域の内蒙古自治区や西北地域の寧夏省までいくつかの出版社は積極的に日本古典文学の漢訳本の出版に力を注いだ。と同時に、中日比較文学の研究書の漢訳にも尽力した。例をあげよう。

野口元大著、斯英琦訳『從伝承到文学的飛躍——「竹取物語」和「斑竹姑娘」』、少年兒童出版社、1983年。

丸田清子著、申非訳『源氏物語与白氏文集』、國際文化出版公司、1985年。

中西進著、馬興国、孫浩訳『源氏物語与白楽天』、中央編訳出版社、2001年。

中西進著、王曉平訳『水辺の婚恋——万葉集与中国文学』、四川人民出版社、1995年。

松浦友久著、加藤阿幸、陸慶和訳『日中詩歌比較論稿——從万葉集の書名談起』、民族出版社。

辰巳正明著、石観海訳『万葉集与中国文学』、武漢出版社、1997年。

川本皓嗣著、王曉平『日本詩歌的伝統一七与五的詩学』、訳林出版社、2004年。

後藤昭雄著、高兵兵訳『日本古代漢文学与中国文学』、中華書局、2006。

中西進著、劉雨珍、勾艷軍訳『万葉集与中国文化』、中華書局、2007年。など。

「翻訳は異文化遭遇の現場」と言われるように、訳者は中日文化の関連性と相違性を実感した。翻訳家が書いた比較研究の論著はよく愛読された。中日の伝統的小説における比較研究の面では、南開大学教授李樹果氏が著した『日本読本と明清小説——中日文化交流史的透視』²⁹は、またとない傑作で、凡そ32万字の巨編である。

李樹果氏は長年にわたって日本の和歌、俳句、戯曲、小説の研究をし、日本古典文学に対する造詣が深く、論文は『日本語学習と研究』などの学術誌に多篇掲載されている。氏は多年の勤勉を積み、日本読本の代表作『南総里見八犬伝』を中国語に翻訳、刊行して³⁰、それが故に日本読本をしみじみ体得しうる。

読本とは、江戸時代に流行したもので、さまざまな絵本とは性格が相違した通俗小説の類である。読本作品はたいてい、そのストーリーやプロット、構造、人物の設定などの面において中国の小説を模倣、改作する。日本人の所謂「翻案」で、氏が「翻改」と称す。読本と中国の小説との関係、とくに読本の出典を指摘、即ち中国のどの小説の翻案かについては、日本の学者はすでに大量の研究成果を上げてい

29 李樹果著『日本読本小説と明清小説——中日文化交流史的透視』、天津人民出版社、1998年。

30 李樹果訳、『南総里見八犬傳』、南開大学出版社、1992年。

る。氏は日本学者の先行研究を摂取、参考し、それに要約して読本と中国文学との関連を明らかにしている。読本と中国文学の関係について、氏は下記の如く、

まとめていえば、三つの書物が挙げられる。まずは『剪灯新話』（『余話』も）の影響であり、それによって日本の翻案小説を誕生させ、読本の創作に特別な書き方を提供されている。次に、「三言」があり、その翻案作品に前期読本の誕生を齎された。最後は『水滸伝』で、その翻案は後期読本を胚胎、育成した。

という。氏の著作を即ちこの三部および他の中国小説の日本読本への影響を検討したものである。

中日古典文学の交流史的、及び比較文学的研究はほかにもあり、相当の成果を遂げた。たとえば、遼寧大学教授馬興国氏は1978年より1993年にかけて、『日本問題』誌に数篇の論文を掲げ、中国古典小説の『遊仙窟』『三国演義』『搜神記』『西遊記』『世説新語』『三言二拍』『金瓶梅』『紅樓夢』『水滸伝』などの作品の日本伝播及びその日本文学への影響を言及されている。これらの論文は、『中国古典小説と日本文学』³¹に収載している。

『平家物語』³²の漢訳者のひとりである翻訳家申非氏は、『日本語学習と研究』などの諸誌に「『平家物語』と中国文学」（1985年）「『雨月物語』と『剪灯新話』」（同年）などを掲げた。

楊烈氏が翻訳されている中国のはじめての『万葉集』の全訳は、1984年出版されたが³³、18年後、2002年新しい全訳が完成された³⁴。その訳者である吉林大学趙樂性教授は中日詩学理論の比較研究においては重みのある論文を幾篇著し、「日本中世和歌理論と我が国の儒、道、仏」³⁵「和歌理論の形成と我が国の詩学」³⁶などが、同氏の編集した論文集『中日文学比較研究』³⁷に収録されている。

同大学于長敏教授は『比較文学と比較文化漫筆』³⁸という薄い本を著し、なかの「中日文学篇」に「いくつかのグループの中日民間説話の比較研究」という一篇が、かなり趣のあるもので、後に氏はこの課題について深く検討し、『中日民間故事比較研究』³⁹という一冊にまとめた。この書は神話編と民間故事編とに分けられる。

その第一編に、中国の盤古神話、伏羲兄妹神話、女媧の人間作り神話の日本神話への影響が論及され、また、愚公の山移し、精衛の海填み、夸父の日追いの神話が

31 馬興国著『中国古代小説と日本文学』、遼寧教育出版社、1993年。

32 周啓明、申非訳『平家物語』、人民文学出版社、1984年。

33 楊烈訳『万葉集』、湖南文芸出版社、1984年。

34 趙樂性訳『万葉集』、訳林出版社、2002年。

35 趙樂性著「日本中世和歌理論と我国儒道佛」、『吉林大学学報』、1987年第6期。

36 趙樂性著「和歌理論の形成と我国詩学」、『日本文学』、1987年第3号。

37 趙樂性、孟慶枢、于長敏主編『中日比較文学論集』、時代文芸出版社、1992年。

38 于長敏著『比較文学と比較文化漫筆』、吉林大学出版社、1994年。

39 于長敏著『中日民間故事比較研究』、吉林大学出版社、1996年。

日本神話に影響しなかったことについても分析をし、そこに中日両国の民族性の差異が反映され、日本人がせっかちで、強韌性に乏しく、功利主義的で自然に従順しがちといった国民性につながると指摘されている。

第二編に、著者は通常の分け方で中日民間説話を、天外より子を賜り、食欲、羽衣天女、シンデレラ、動物の恩返し、嫉捨、存在解釈、求婚難題談といったタイプに分類し、比較研究をした。その結論には、啓発的なものがある。たとえば、日本の民間説話に、対立した双方が武力を持って相手を全滅するのではなく、相手を感化するのが普通で、階級の対立の代わりに人間の共生が唱えられるというわけである。中日民間説話についての比較的研究が少なからぬ論文に散見されるけれども、体系化した論著なら、于氏の著は第一冊で、注目に値する。

また、山東大学教授高文漢氏に46万字の巨編『中日古典文学研究』⁴⁰があり、通史的性格が強く、中日古典文学史上各時代を全体的に納められている。この書は日本漢文学の発展ならびに重要作家作品を主とし、日本の漢詩、漢文及びその中国文学との関連を検討し、また、日本の物語文学『竹取物語』『源氏物語』の中国文学受容についても論及され、文学史材料、作家作品の背景資料が大量で、紙幅が多く占められて集中すべき論題と比較文学のあるべき理論的性格が余儀なく薄くされたが、一般読者にはやはり役立つのであろう。

80代後、日中の比較文化の研究は盛んになる。『比較文化：中国と日本』⁴¹の著者である嚴紹壘、王家驊、馬興国、王晓平、王勇、劉建輝六人はすべて「日文研」の経験者であることが注目されるだろう。中国古典文学研究者にして日本の漢詩文を注視していた学者も何人かが数えられる。例えば、『日本漢詩選評』⁴²の編集者である程千帆氏、孫望氏は中国の名高い唐詩の専門家であり、『日本漢詩發展史』第一卷⁴³の著者である肖瑞峰氏も、『日本漢詩溯源比較研究』⁴⁴の著者である馬歌東氏も、『中日交往漢詩選注』⁴⁵の編注者孫東臨氏も、『人間の覚醒と文学の自覚——中日の異同を兼論』⁴⁶の著者胡令遠氏もそうである。例外なのは、『日本漢詩聚花』⁴⁷や『日本漢詩と中国歴史人物典故』⁴⁸の編集者は、ロシア語の語学者である王福祥氏である。近年、南京大学で域外漢籍研究所が創立し、張伯偉氏の編集している『域外漢籍研究集刊』⁴⁹が発刊されて、活発な研究活動が展開されていて、各国に所蔵して

40 高文漢著『中日古代文学比較研究』、山東教育出版社、2000年

41 嚴紹壘、王家驊、馬興国、王晓平、王勇、劉建輝著『比較文化：中国与日本』、吉林大学出版社、1996年。

42 程千帆、孫望選評『日本漢詩選評』、江蘇古籍出版社、1998年。

43 肖瑞峰著『日本漢詩發展史』第一卷、吉林大学出版社、1992年。

44 馬歌東著『日本漢詩溯源比較研究』、中国社会科学出版社、2004年。

45 孫東臨、李中華選注『中日交往漢詩選注』、春風文芸出版社、1998年。

46 胡令遠著『人的覚醒与文学的自覚——兼論中日之異同』、復旦大学出版社、2002年。

47 王福祥、汪玉林、呉漢櫻編『日本漢詩擷英』、外語教学与研究出版社、1995年。

48 王福祥編著『日本漢詩与中国歴史人物典故』、外語今教学与研究出版社、1997年。

49 張伯偉編『域外漢籍研究集刊』、中華書局、第一輯、2005年；第二輯、2006年；第三輯、2007年。

いた漢籍がとりあげられてきていたが、一番多くのは日本に保存している漢籍であると言っても過言でない。そのなかに、これらの資料と日本文学を結び付ける論文が次々に発表されて、漢籍の研究に対して新しい道を切り拓くことを期待している。

(四)

日中両国は千年以上に亘る文化交流の歴史があり、日中文化交流史は両国国民の貴重な文化遺産である。我々は更に多くの中国の一般読者にこの素晴らしい遺産の価値を紹介しなくてはならない。また、20世紀70年代から多くの中国学者が日本に留学し、日本文化の立派な研究者になった。

王曉平は多くの中国読者に彼らの日本文化に対する新しい見解、認識を受け入れ、更に彼らの新しい研究成果をぜひ読んでもらいたいと思う。そのために、近年、『人文日本新書』と『日本中国学文萃』なる二つの叢書を編集し、現在合わせて40種類近くの本が相次いで出版され、中国学術界で高い評価を得ている。

『人文日本新書』の内容は広範囲に亘っている：

王金林『日本人の原始信仰』

林少華『村上春樹と彼の小説』

周閔『吉本ばなの小説』、

曹志偉、陳晏『日本旅行文化』

盧盛江『空海と文鏡秘府論』

楊偉『少女・漫画・女作家・日本人』

邱嶺『日本における三国演義』

嚴明『花鳥風月の絶唱』

高寧『越界と誤読』

劉立善『経巻のない宗教——日本神道』

王向遠『源頭活水——日本当代歴史小説と中国歴史文化』

蔡春華『現世と想像——民間故事における日本人』

張哲俊『中国題材の日本謡曲』

宋在新『千年の唐詩の縁——日本における唐詩』

王若茜、齊秀麗『浮世草子における恋の世界』

高文漢『日本近代漢文学』

劉雨珍『万葉集の世界』

王曉平『唐土からのタネ——日本への流布と受容の敦煌物語』

王曉平『遠くまでの衣鉢——日本流布と受容の敦煌仏教文学』

陳洪兵、金舒鶯、劉穎『日本の相撲と力士』 など。

上述の著書は、違う角度から日本の古代、特に現代文化の新発展を反映し、それらを生き生きと、分かりやすく描いている。それがこれらの本が歓迎される大きな要因であろう。

『人文日本新書』中の本は、日本文化研究者の好評を得ただけではなく、更に中国学を研究する学者の大きな注目も集めている。ここで例を少し挙げよう。

一つは、考証学の収穫である。南開大学盧盛江教授の『空海と「文鏡秘府論」』はそうであろう。盧盛江教授が著した『文鏡秘府論彙校彙考』⁵⁰は『文鏡秘府論』を研究する斬新な学術成果であり、また『空海と「文鏡秘府論」』は日本寺院から発見された夥しい新資料を引用し、唐代の詩論に対して新しい見解も発表している。このような資料は中国ではすでに散佚しており、そういった意味でも唐代の『詩病説』研究の空白を埋めている。

二つに、中国的、世界的、全体的な視野に立って、日本文学を見ようとした著書である。『日本文学の漢訳史』⁵¹の著者である北京師範大学王向遠教授の『中国題材の日本文学史』は、吉川英治の『三国志』、司馬遼太郎の『項羽と劉邦』、陳舜臣の『阿片戦争』、北方謙三の『水滸伝』などを含む中国歴史、文化を題材にした何十種類もの作品を取り上げ、全面的に研究し、中国の同じような作品と比較研究を展開し、これらの作品に高い評価を与えた。

張哲俊氏の『中国題材の日本謡曲』では、日本の謡曲における中国文学の要素、史伝や小説における物語と語句を源流として、日本脚本家の獨創性を論じ、研究者の触れることの少ない両国の演劇の悲劇性にも目を注いでいる。彼は、『中日古典悲劇の形式』⁵²『中国古代文学におけるイメージの研究』⁵³『東アジア比較文学案内』⁵⁴などの著者である。

ついでに、曹志偉が著した『陳舜臣の文学世界』も年内に出版する予定で、これは陳舜臣研究の初めての専門著書で、日中両国の学者が充分に研究してこなかった領域でもある。王向遠が中国人の立場で行った分析は日本読者の見方とは完全に一致することは難しいが、その相違こそが比較文学者が最も興味深いと考える課題であると思われる。

三つは、日本漢文学の研究である。日本の漢文、とりわけ漢詩は世界に例を見ない特質を持つ、優れたものであるから、これは是非とも正当に評価して、その伝統を継承しなければならないと思われる。江戸の後期から明治へかけての作品は素晴らしいが、明治に入ってナショナリズムの風潮の中で、日本の正統文学としての扱いを受けなくなったのは事実である。高文漢が著した『日本近代漢文学』、敝明が著した『風花雪月の絶唱』などの日本漢文学に対する研究は、日本学者の研究と相互

50 盧盛江校考『文鏡秘府論彙校彙考』、中華書局、2007年。

51 王向遠著『日本文学漢訳史』、寧夏人民出版社、2007年。

52 張哲俊著『中日古典悲劇の形式——三個母題与嬗變的研究』、上海古籍出版社、2002年。

53 張哲俊著『中国古代文学中的日本形象研究』、北京大学出版社、2004年。

54 張哲俊著『東亞比較文学導論』、北京大学出版社、2004年。

的に連動させ、補充する役割ができる。

最後に、王暁平の日本に流布、受容されてきた敦煌文化の研究である。『日本への流布と受容の敦煌物語』、『日本流布と受容の敦煌仏教文学』では日本で保存され、中国ではすでに遺失した敦煌資料を大量に収集している。敦煌文学に関連した日本平安時代の願文、対策文、書儀、上梁文などに対して広い範囲で調査し、以前の学者達が学刊で発表した考えの間違いを正した。中国の著名な敦煌学者の徐俊、柴劍虹、張鴻勳などは、この二冊を新しい敦煌文学研究の開拓とし、更に読者の日本文化の独自性の理解にも役立つと考えている。

王暁平が編集したもう一つの叢書『日本中国学文萃』は、日本学者が中国文化を研究した本 20 種類を翻訳したもので、その中には桑原隲藏氏の『東洋学説苑』、南方熊楠氏の『十二支考』、青木正児氏の『中華名物考』などが含まれ、出版後に中国学術界に大きな反響を巻き起こした。北京の多くの雑誌で書評が発表され、日中両国文化は相互に対照し、解釈し合う関係を形成していると指摘し、中国の学者は更に海外の中国学研究を重視し、違う意見に耳を傾けるべきであるとしている。また批判者の中には更に日本学者が中国歴史研究に対する最新の成果を翻訳すべきとの声があった。

この二つの叢書を著し、翻訳した作者、翻訳者はベテランの学者から新鋭な青年学者まで年齢層は広く、彼らは自ら日本文化を体感し、中には長年日本で仕事をしている学者もあり、そのため日本文化の事細かな観察と実際の体験が文章をより魅力的に引き立てている。

二つの叢書シリーズが出版して以来、非常に読者の歓迎を受け、そのため寧夏人民出版社と中華書局はそれらを長期出版計画し、引き続き新書を出版する予定である。また国際日本文化研究センターの井波律子教授の『中国幻想物語』も最近中華書局から出版される運びである。

その二つの叢書シリーズの作者、翻訳者の中にはこの場に居られる先生方の知人や学生がいるかもしれない、私はみなさんにぜひともこれらの本を読んでほしい。そして自分の知人や学生が新しい成果を上げているかどうか見て頂きたい。

長い間に亘って、日中両国の文化、文学は相互に吸収し合い、不足を補う関係にあり、今後もこのような交流は更に頻発に、深くなってゆくであろう。いま、どのように伝統文化の資源を利用し、これからの時代の新しい文化をどう発展させるのか、中日両国とも似ている課題に直面している。中国においては、日本古代文学の研究は若い学問であり、これからの学問である。日本の隣邦において、日本文学の研究に携わる我われは、今後この分野において一層の努力をするべきであろう。中日両国の文化交流の密度が高まるにつれ、相手に対して深く理解する必要性も高まり、過去の単なる「一向交通」的方法論にすぎなかった時代から脱皮して、中日比較文学自体が異なる文化の間の相互的接触と対話の学問として発展することが要請され、その存在価値が問われるようになったのである。日本にしても、中国にして

も、現代文化を構築する過程で伝統文化が果たす役割は大きなものがあるし、両方とも興味を持っている課題も多く残される。

今後の学問の交流では、国際日本文化研究センターが提唱している平等に対話するという国際協力の精神は、日本文化が更に広い範囲で伝播され、理解されるようになり、そして各国の文化建設の手助けにもなると思われる。